

Title	新羅史研究(今西龍遺著, 近澤書店刊行)
Sub Title	
Author	浅子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.170- 170
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は外征に伴ふ疲弊甚しく、他方匈奴は衰運を辿るの梗概を記述されてゐる。更に王莽の變を経て漢室の再興に及ぶ。第五章、佛教東傳の初期に於ては大月氏國で發達成熟せる佛教が東漸せる経路に就ての考證を述べ、古代西域文化の概要が紹介され、當時の支那に於ける社會的動搖に及んで擱筆されてゐる。

卷末に地圖を附するもの四、無数の挿繪と共に讀者の理解を一層深めることであらう。

こは提要にあらず、史論にあらず、實に概説の書、即ち先生の東洋古代史を最もよく短的に表現せる一書である。好著惜しむらくは誤植、脱漏多く、殊に四九八—四九九の間の二頁を落す等甚だしきものである。幸ひ史學の本號に正誤表を掲げ、その短を補はれるさうで誠に喜ぶべき事である。(近山金次)

新羅史研究

(今西龍遺著
近澤書店刊行)

本書は朝鮮史を専攻せられた、故今西龍博士の遺著の第一冊として出版されたもので、これには博士が朝鮮史研究に進まれたその出發點が新羅の舊都慶州の探訪にあつて、新羅に關する研究が博士の朝鮮史に對する研究の基礎となつたと考へられるといふ内面的な意義が附與せられてゐる。

本書の内容は先づ最初に總論としての新羅史通説を載せ次に新羅研究の最初の報告としての新羅舊都慶州の調査記を掲げ以下官職制度、傳説、金石文、古文書、遺蹟遺物に關する研究を順次に收めてゐる。

卷頭論文たる「新羅史通説」は京都帝國大學文科大學に於ける二つの講義案を合せ録したもので、獨立の論文でないため多少缺點もある様であるが、新羅史の通説としてはこれ程よくまとまつたものは從來出てゐない。貴重な文獻といふに憚らない。

本論文は先づ新羅本源地の地勢から始まつて、その建國、建國傳説を敘し、それに關聯してその階級と官位とを述べ、次に、第一に原始的國家が發展すべき地理上の好位置に在り、第二貴族政治にして、交代して王となるの特殊の制度あり、第三に血の混ぜし結果強健なる民族となつた新羅の興起を説き、更にその中代、下代に及び、その間の外國關係特に、我國との交通を力説し、最後に新羅王朝と日本との交通が世に想像さるゝよりも頻繁なりしこと、國際交通の外に商賈の貿易の盛んなりしこと(但し新羅より我國に來りしが如し)に注目し、此時代唐の貨物文化にして新羅を経て日本に入りしもの、唐より直接に入りしものに比して甚だ多かりしが如し、と結んでをられる。

要するに、本書は一貫した新羅史の著述ではないから、多少の重複、前後の矛盾、は己むを得ないこととして、朝鮮史學研究の指導標としての本書の價值は、博士今西の名と共に永久に失はれるものではない。

博士の遺業が、これより逐次刊行せられて八冊の朝鮮史大系となることを期待して止まない。(本文五九五頁、定價金五圓 淺子勝二郎)